

心理学部の大学生の心理学への学習動機の検討

塩野 聡子

研究目的

近年、大学生の学力低下が問題視されており、それらの原因の中の1つに学習意欲が挙げられる。学習と学習意欲には深い関連性があり、学習意欲を高めることにより学習行動の頻度を高めることが可能である。学習意欲や学習動機づけは自らが所属する大学の学部によっても変わる可能性がある。例えば、卒業後にその学問に特化した専門的資格を取得出来るだけでも、学生側の意欲は高まる可能性がある。そこで、本研究では他学部と比較して専門職の資格が取得できる、文系の中では大学院進学者が多いという独特の特徴を持つ心理学部に所属している大学生を対象とし、心理学部の学生特有の学習動機づけと一般的な学習動機づけとの関連性を検討する。

論文構成

第1部では、学習者の発達段階に伴った学習意欲や学習動機づけの構造的変化や、学習意欲を支える動機づけ要因について述べられている。第2部は予備調査やその結果について、第3部では、本調査の方法や結果について述べられている。第4部では、実験の総合考察がなされている。

結論

因子分析の結果「心理職への関心」と「心理学への学術的興味」の2因子が抽出され、対象者は心理職を目指して大学院進学を考えている学生と、心理職や大学院進学は考えていない学生に大きく分かれた。心理職を目指している学生と目指していない学生の間では、特に学習動機づけの構造に大きな差は見られなかった。しかし、唯一「心理学への学術的興味」が強い学生は、「勉強しておかないと不安だから」や「課題などやらないといけないものを与えられるから」など、ネガティブな理由から学習に取り組んでいるという相違点が見られた。これに対し、「心理職への関心」が強い学生は、特に学習をやらされていると感じている傾向は見られなかった。これは、心理職という将来の目標を持っており、それを達成するために自発的に学習することが多いことを示している。

今回の実験の問題点は、質問紙の教示文が適切でなかった点である。質問文を教示する時に、心理学部での授業や勉強と限定せずに教示してしまったため、回答者が大学のその他の講義やサークル活動、資格試験のための勉強などを想定して回答してしまった可能性がある。心理学部での講義や勉強と限定していれば、また異なった結果が得られたかもしれない。